

2016年9月  
1107号

# 万葉

Manyo

一冊の会 編集部

〒160-0015 東京都新宿区大京町5

(一冊の会研究室)

## レソト王国ラモエツィ大使との食事会 ～6年間ありがとうございました～

レソト王国より国王王妃のご来日が決まり、日本レソト王国友好協会・一冊の会として嬉しい歓迎の準備に取りかかった最中、突然ラモエツィ大使が日本駐在の任務を終えて帰国されるというお知らせがありました。9月19日の飛行機で出発とのことで、急きょ尾崎行雄記念財団の応接間で、日本レソト王国友好協会初代会長の相馬雪香先生のお写真に見守られて、少人数のお別れの昼食会が開かれました。

出席者は大使ご夫妻、石田理事長、INPSの浅霧理事長、大槻会長、小山副会長以下、全員10名で、FAWAシンガポール会議に参加される浅霧理事長が通訳を務めてくださり、心温まる感動のひとつときでした。まず、大槻会長の挨拶は胸いっぱいのお別れの悲しみと感謝の思い出に始まりました。



8年前の2008年日本で行われたTICATの折、日本レソト王国友好協会を設立、当時の日本駐在リカテ大使とご一緒にレソト王国モンシリ首相ご一行の歓迎会など精一杯の交流を重ねてまいりました。そして、真実の友好は方法ではなく、真心であり、変わらぬ友情であると心を定め、現在のラモエツィ大使ご夫妻とは、この6年間を60年に値する思いを込めた真心でお付き合いしてまいりました。



特に、東北の災害支援に何度もご訪問してくださった大使のお名前を、なんとか日本国民に、否、世界の人々に残したいと思い、パン国連事務総長のご退任にあたり、お届けする、被災者と支援者との心の交流のハンカチ支援プロジェクトにメッセージとご署名をお願いし、快くご承諾をいただきました。

そして、大使には大槻会長から見事な蒔絵の品を、又、一同からとして、大使夫人には日本の二層の蒔絵のお重箱の贈呈がありました。大使のご挨拶の前に大使夫人に一言とお願いすると、「彼女はもう胸がいっぱいで言葉にならないから」とおっしゃって立ち上がられた大使ご自身が涙ぐんで、しばしお言葉が出ないのです。お隣のマダムはもう涙が止まらずティッシュを何枚も使って涙をぬぐうという光景に私ども一同に感動の輪が広がりました。

来日した6年前、当時の大使館の通商担当官、金森さんと共に初めて大槻会長とお会いた時、お祖母さまのことを思い出されたそうです。多くは語られませんでしたでしたが、特別な出会いが想像できました。そして「自分の赴任前に来日された現首相から一冊の会が素晴らしい歓迎会を開いてくれたこと、東日本大震災の被災地の惨状、一冊の会の被災者に寄り添う献身的な支援の活動など、様々な話を聞きました。そして、私も皆様と一緒に東北地域の方々と真心の友情を結ぶ貴重な体験・思い出を積むことが出来ました。本当に感謝しています。一冊の会がますます成功し発展されることを確信しております。私の家族にとって、一冊の会の活動に参加できたことを心から感謝します。日本赴任中に一冊の会から多くのことを学びました。皆様が支援の必要な人々に寄り添って尽くされている103回以上の活動を、私は国に帰ってからやっていきたいと思っています」と挨拶を終えられました。夫人は「私の想いは大使と同じです」と一言、また涙が溢れました。

そして感動の空気の中でやっと会食が開始、様々な和食のお惣菜と栗ご飯やお赤飯のおにぎりの二段重ねの見事なお弁当、ワイン入りのケーキに紅茶、果物の盛り合わせなど、心のこもったおもてなしで、出発時間が恨めしく感じられましたが、本当に家族のようにテーブルを囲みました。

応接室で記念撮影をした後も、尾崎峯堂翁の銅像を背景に再び記念写真、大使、婦人と全員がそれぞれに抱き合っけて心からの友情と送別の悲しさを確認し去りゆくお車をお見送りしました。

閉会後は日本レソト王国友好協会を設立した時の相馬雪香先生のお姿やその後、お体をこわされて96歳でご逝去されたご様子など先生のご精神をご一生を偲ぶ語らいのひとつを過ごしました。そして石田理事長、大槻・小山・加茂事務局次長は11月24日の打ち合わせが行われました。

F A W Aシンガポール会議への出発も近づき、歓迎晩餐会のお知らせも印刷配布という段階になりました。全ての活動の無事故大成功のため、私たち全員が一人ひとり全力で取り組んでいきたいと思ひます。どうぞ皆様よろしくお願ひ申し上げます。



文責：箱根・大槻・小山